

阪神・淡路大震災からの生活復興3類型モデルの検証 —2003年生活復興調査報告—

Life Recovery Patterns in the Victims of the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake

矢守 克也¹, 林 春男¹, 立木 茂雄², 野田 隆³, 木村 玲欧⁴, 田村 圭子¹

Katsuya YAMORI¹, Haruo HAYASHI¹, Shigeo TATSUKI², Takashi NODA³,
Reo KIMURA⁴, and Keiko TAMURA¹

¹京都大学防災研究所

Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

²同志社大学文学部

Department of Sociology, Doshisha University

³奈良女子大学大学院人間文化研究科

Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's University

⁴名古屋大学災害対策室

Disaster Management Office, Nagoya University

Three types of life recovery patterns from disaster damages, that are, recovery back to what a life used to be (recovery), reconstruction of new active life styles (reconstruction), and retreat into a depressive state (retreat), were deduced from various disaster psychological findings, and also generated from the results of a preceding questionnaire survey. To examine the validity of the typology, a questionnaire survey was conducted in 2003 in the region hit by the Great Hanshin-Awaji Earthquake. The results showed that three types were differentiated clearly, and that the respondents were approximately distributed 70% for recovery, 20% for reconstruction, and 10% for retreat. The determinants and specific characteristics of these three types of victims were also investigated.

Key Words: life recovery, reconstruction of new life styles, retreat into a depressive state, the Great Hanshin-Awaji Earthquake

1. 目的

(1) 研究の背景—「生活復興調査」の経緯と成果—

巨大災害に見舞われた社会、および、そこに暮らす人々の復興について検証するとき、建物やライフラインといった都市基盤の復興とともに、人々の生活復興 (life recovery) —被災者の心身面の回復、日常生活への回帰、地域経済の再生などが重要であることは論をまたない。この生活復興、および、その基礎として位置づけられた生活再建課題について、林らの研究グループは、これまで、阪神・淡路大震災の被災者を対象として、きわめて体系的な研究を展開してきた。

第1に、林¹⁾は、震災から5年目にあたる1999年、神戸市の「震災復興総括・検証委員会」に生活再建部会を設置し、被災者自身が参加するワークショップを通じて生活復興について検証した。1600枚ものカードデータが親和図法・連関図法を用いて整理・体系化され、最終的に、生活再建課題の7要素、「すまい、人と人とのつながり、まち、そなえ、こころとからだ、くらしむき、行政とのかかわり」が抽出された。

第2に、大規模な社会調査によって、より広範な被災者を対象として、上記のワークショップ研究から導出された生活再建7要素モデルの妥当性の検証が試みられた。すなわち、「震災後の居住地の変化と暮らしの実情に関する調査」(以下、1999年調査)²⁾、「2001年生活復興調査」(以下、2001年調査)³⁾と2度にわたって、約1000人もの有効回答者を得た大規模な調査が実施された。

特に、2001年調査では、生活再建7要素の実状が被災者の生活復興感を規定するとの仮説のもと、両者の関係が体系的に分析された。生活再建7要素については、7要素それぞれが指標化された。また、生活復興感については、「震災は新しい現実の創出であり、被災者の生活復興は新しい現実への適応の程度から推定される」との基本認識にたつて、日々の生活の充実度、現在の生活満足度、明るい将来展望、の3側面に関する肯定的反応をもって測定された。両者の間の関連性分析の結果、生活再建7要素のうち、すまい以外の6要素が生活復興感と有意な関連性をもっていることが明らかになった。

(2) 生活復興感=生活満足度か?

本研究は、上記(1)で述べた一連の研究を踏まえて実施されたものである。具体的には、1999年調査、2001年調査に引き続いて2003年1月に実施された3回目の調査(「2003年生活復興調査」、以下、2003年調査)から得られたデータが、本研究の基礎データである。ただし、2003年調査では、生活復興感について詳細に検討するために、調査方法・内容に関して2つの大きな変更を加えた。第1は、調査対象者の一部を2001年調査と重複させパネル調査とした点である。これによって、被災者の意識・行動の時間動態をより精密に追跡可能となった(パネル調査の分析結果については、本論では言及しない)。

本論で主題的に検討するのは、第2の変更点、すなわち、基軸概念である生活復興感の見直しである。上述の通り、2001年調査では、生活復興感、概念的には生活満足度と実質的に等値され、実際の測定にあたっても生

生活満足度に関連する諸項目（「毎日のくらしに満足していますか」など）によって指標化された（以下、「復興感尺度2001」）。震災という非常に大きな出来事を体験した被災者の生活復興感を、生活満足度とほぼ等値して測定する方法は、近似的方法としてはきわめて有効である（詳細は、林³⁾を参照）。しかし、この方法には問題点も残されている。なぜなら、被災後の、ある時間断面における生活満足度が一定の水準にあるとして、問題は、それが、何らかの動的なプロセスを経た結果であるのか、あるいは、そうではないのかという点にあるからである。生活満足度（復興感尺度2001）を測定するだけでは、この両者を区別することは困難である。よって、生活満足度のように、被災者以外の調査対象者にも適用可能な一般的満足度を測定する尺度も、比較検討上必要ではあるが、あくまで被災体験を踏まえつつ、そこから生活を再建・復興し、その結果として、調査時点において一定の生活満足度を示すに至った（あるいは、至っていない）者としての被災者に焦点をあてる必要がある。

他方、生活満足度とともに、調査時点における心身のストレス状態（たとえば、「最近、気持ちが落ち着かないことがありますか」などの項目）を、生活復興感を推定する測度として利用する立場があり、実際、2001年調査でも、本調査でも、こうした項目を調査票に加えている。たしかに、阪神・淡路大震災のような未曾有の巨大災害に見舞われた場合、少なからぬ被災者が心身に不調をきたし、相当期間苦しむ場合が存在する。しかし、すべての被災者がそれに該当するわけではなく、長期的視点（数年から十数年）に立てば、むしろ、多くの被災者は、こうした状態を早晩脱すると言ってよい。よって、長期にわたる生活復興プロセスを視野に入れた場合、PTSD⁴⁾やIES関係の測定尺度⁵⁾（のみ）をもって、生活復興感をとらえる方法にも限界があろう。

(3) 「生活復興3類型」の提案—ライフイベント研究のレビューから—

上記(2)の議論を踏まえたとき、生活復興感の検討に関して示唆を与えてくれる研究が、精神医学、心理学分野を中心にいくつか存在する。それは、極めて重大な出来事（ライフイベント）、より正確には、当人の人生を大きく左右する（と少なくとも当事者には感受される）出来事を体験した、あるいは、そのような出来事に直面している人々が、当該の出来事をどのように意味づけ、彼（女）の人生を再構成しようとするか—こうした問題に関する諸研究である。ここでは、これらの諸研究を簡単にレビューし、その上で、生活復興感への新しい視角として、「生活復興3類型」を提起しよう。

第1に、キューブラー・ロス⁶⁾や、デーケン⁷⁾による死の受容に関する一連の研究がある。こうした諸研究に示される悲嘆の受容プロセス（grief process）は、自ら、あるいは、近親者の死を念頭に置いたものであり、被災者一般に適用するには視点が狭いと言わざるを得ない。しかし他方、「（悲嘆のプロセスを通じて）新しいアイデンティティを獲得した人は、より成熟した人格へと成長することができる」という指摘は、被災体験を経ながらも、新たな生活を構築し日常的様相へと回帰する（その結果として、生活満足度も高まる）という被災者の生活復興プロセス一般にも十分適用可能なものであろう。

第2に、リフトン⁸⁾による「退却（retreat）」概念も、本研究にとって有効な分析概念である。リフトンは、精神科医として、退役軍人らの調査・ケアにあたる中で、人間は心理歴史的（psycho-historical）な存在であること

を重視し、衝撃的かつ否定的な体験が、しばしば、体験者の無関心（無感覚）をもたらすことを指摘した。「退却」は、こうした感覚麻痺に縛られたままの状態を表現する用語であり、生活復興を遂げることが困難な人々の心理様相を記述するにあたっても有効な概念である。

第3に、フランクルの一連の研究も重要である。ナチの強制収容所での体験を報告した「夜と霧」⁹⁾で著名な彼の議論がカバーする範囲は深遠であるが、その要諦は、「意味への意志」ということに尽きるであろう。人生—自らの実存—に意味を与えること（sense-making）の重要性である。巨大災害が、それまでの世界、および、それを前提に構築されてきた被災者の人生を根底から崩壊させる出来事であることは疑いがない。「何のために生きてきたのか（生きていくか）わからない」という被災者の言葉は、反面から見れば、人間のもつ「意味への意志」の強烈さを示している。生活復興の根幹の一つは、「意味への意志」の充足度と見ることができよう。

最後に、Holmes & Rahe¹⁰⁾が提起した社会的再適応評定尺度に注目しておきたい。これは、生活イベント（離婚、親友の死、失業など）から生じるストレスと再適応との関係を、「人々がさまざまな生活上のできごとに出合ったときに、それによって生活のバランスが崩れたのを回復（再適応）するのにどのくらいのエネルギーを必要とするか」という観点から検討しようとした研究である。ストレスに焦点を置いた研究ではあるが、短期的な心理反応としてのそれではなく、中長期にわたる生活の回復（再適応）過程に注目している点は興味深い。

以上に集約した従来の研究を踏まえたとき、被災者の生活復興感の概念化・測定にあたっては、事後のある時間断面における生活満足度（「復興感尺度2001」）とは異なる視点として、あるいは、それを補完する視点として、次の2つの要素が重要であることがわかる。第1は、当該の災害イベントが、被災者のライフサイクルの転機を画す重要なライフイベントとして機能しているか否かである。第2は、仮に、被災が重大なライフイベントであるとして、それが、その後、新たな意味を付与され、相対的によりポジティブなイベントとして意義づけられているのか、反対に、よりネガティブなイベントとして定位されているのか、という視点である。本研究では、これら2つの視点（軸）を直交させることで、最終的には、図1に示した「生活復興3類型」を提起したい。このうち、後者は、生活満足度（「復興感尺度2001」）とも一定の相関を有すると予測されるが、前者は、生活満足度とは独立した次元を構成しているものと考えられる。

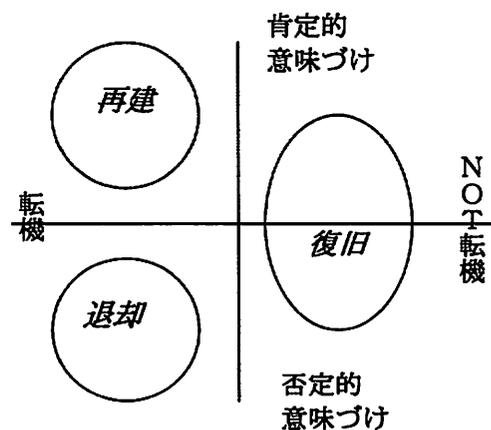


図1 生活復興3類型の模式図

第1の類型は、「復旧 (recovery)」である。これは、被災が、重要なライフイベントとして位置づけられていない人々、すなわち、被災が人生における重大な転機を構成していない人々である。よって、被災体験は、多少のゆらぎを人生にもたらしたものの、その後の復興プロセスは、被災前と近い状態、つまり、旧へと復する過程として位置づけうる人々である。「いろいろあったが、何とか元通りになりました」、「あの頃は大変でしたが、もう昔のことになりました」といった体験描写をする人々が、この類型にあたる。

第2の類型は、「再建 (reconstruction)」である。これは、被災が、重要なライフイベントとして意義づけられ、かつ、それを契機として、人生をよりポジティブな方向へと転換させた (と感覚している) 人々である。たとえば、震災をきっかけに、ボランティア活動に意義を見いだしたといったケースは、この類型にあたる。

第3の類型は、「退却 (retreat)」である。リフトンの概念を借用したこの類型は、被災が、人生における重大な転機を構成し、かつ、それを否定的に位置づけざるを得ない人々である。「震災の後は、生きがいをなくしてしまった」と語るような被災者は、その典型である。

なお、以上の3類型は、本来、時間とともに変動していくものと考えられる。たとえば、被災直後は、「再建型」であった人が、その後、数年の時を経て、「退却型」へと至るケース、あるいは、その逆のケースなどを想定することが可能である。すなわち、図1は、言わば、そうした時間動態のある断面で切ったものに過ぎない。こうした時間変動については、本研究では検討されていない。今後の課題としたい。

以上、本研究の背景を集約した上で、本論に言う生活復興感と生活満足度 (「復興尺度2001」) との異同について指摘した。さらに、生活復興感の概念整備に有効と思われる諸研究についてレビューし、最終的に、新たな概念 (「生活復興3類型」) を提起した。本研究の目的は、概念的かつ理論的に導出した「生活復興3類型」の妥当性を、2003年調査のデータを用いて実証的に検証することである。以下、2003年調査の具体的実施内容・方法についてまとめ、その後、調査結果について述べる。

2. 方法

(1) 調査実査概要

2003年調査は、被災地に暮らす人々の生活復興の実態を明らかにし、今後の災害対策や復興対策に役立てることを目的に、1999年調査、2001年調査に引き続いて実施されたものであり、さらに、2年後の2005年 (震災から10年) にも4回目の調査が計画されている。

調査実査概要は、以下の通りである。

- a) 調査名: 「生活復興調査」
- b) 調査目的: 阪神・淡路大震災の被災地における生活復興の状況及び復興過程の把握
- c) 調査方法: 郵送自記入式
- d) 調査地域: 神戸市全域及び兵庫県下震度7地域及び都市ガス供給停止地域
- e) 調査対象: 同地域における20歳以上の男女
- f) 標本抽出: 住民台帳からの2段階無作為抽出
- g) 調査数: 3300 (330地点×10名) + 501 (2001年調査設定パネル分)
- h) 有効回答: 1567 (有効回答率 41.2%) (1203 (同 36.5%) + 364 (同 72.7%))
- i) 調査期間: 平成15年 (2003年) 1月15日～2月3日

j) 調査内容: 年齢、性別、職業、家族構成、被害状況 (人的被害、住居被害、ライフライン被害、経済的被害)、避難状況、住宅種別、住宅補修状況、住宅満足度、家計状況、転職状況、生活満足度、生活充実度、生活復興感、心身ストレス、ライフコース変化、家族観、市民性、地域社会の状況、将来への備えなど

(2) 生活復興3類型の測定

上記の通り、2003年調査には、被災者の生活復興に関する多様な調査項目が盛り込まれている。ただし、本研究では、1章の議論より理論的に導出された生活復興3類型 (図1) の存在を実証することを目的としているため、一部のみを分析対象とする。まず、基幹概念である生活復興3類型を類型化するため、以下の2群の調査項目を設定した。これらは、前回までの調査には含まれておらず、2003年調査で初めて設定した項目である。

第1群は、生活復興3類型の構造をそのまま測定項目化したものである。すなわち、表1に示したとおり、「震災前後で自分は変わったと感ずるか」、「(変わったとすれば) よい方向か悪い方向か」、「震災前後で自分の人生は変わったと感ずるか」、「(変わったとすれば) よい方向か悪い方向か」の4つの項目であり、これらについて、4件法で回答を求めた。

第2群は、震災をライフコースの中でどのように位置づけているかを通して、生活復興感を推定しようとする項目群である。合計22項目から成り、すべて5件法で、どの程度回答者に該当するかを問うた。たとえば、「震災での体験は、日常生活では得られない得がたい経験だった」、「震災については、あまり触れてほしくない」、「震災当時から、被災者としての実感はなかった」、「人生には何らかの意味があると思う」、「毎日の生活は、震災前と同じように、決まったことのくり返しに感じられる」といった項目である。

表1 生活復興3類型測定項目

Q34B 震災前後で「自分は変わった」と感ずるか
1. 強く感ずる [96 (6.2%)]
2. やや感ずる [447 (28.7%)]
3. あまり感ずらない [627 (40.3%)]
4. ほとんど感ずらない [385 (24.8%)]
Q34B.1 その変化は、よい方向か悪い方向か
1. よい方向 [101 (19.5%)]
2. どちらかといえばよい方向 [276 (53.5%)]
3. どちらかといえば悪い方向 [127 (24.5%)]
4. 悪い方向 [14 (2.7%)]
Q34C 震災前後で自分の人生は変わったと感ずるか
1. 強く感ずる [151 (9.7%)]
2. やや感ずる [448 (28.8%)]
3. あまり感ずらない [616 (39.6%)]
4. ほとんど感ずらない [340 (21.9%)]
Q34C.1 その変化は、よい方向か悪い方向か
1. よい方向 [75 (13.8%)]
2. どちらかといえばよい方向 [241 (44.4%)]
3. どちらかといえば悪い方向 [191 (35.2%)]
4. 悪い方向 [36 (6.6%)]

(3) 生活満足度測定項目と心身ストレス測定項目

1章 (2) 節で指摘したとおり、生活復興感、生活満足度や心身ストレスとは、完全に等値することはできない概念である。もっとも、生活復興感がこれらの要因と大きな関連を有することも否定できない。そこで、本調査においても、前回調査に引き続き、生活満足度 (「毎日の暮らし」、「今の人間関係」など、6要素に関する満足度を5件法で回答)、生活充実度 (「元気ではずらつとしていないこと」、「自分の将来を明るいと感じるこ

と」など、8要素の現状を5件法で回答), および, ところからだのストレス(「気持ちが落ち着かない」, 「めまいがする」など, 12要素について該当するか否かを5件法で回答), の3側面に関する調査項目群を設定した。「復興感尺度 2001」は, このうち, 生活満足度と生活充実度に関連する項目から得られる。これらの要因については, 後に, 属性要因とともに, 生活復興3類型との関連性を分析することになる。

3. 調査結果と考察

(1) 調査実査の結果

2003年調査を含めた過去3回の調査実査結果は, 表2の通りである。分析に先だって, 2003年調査の有効回答者と2001年調査の有効回答者との間で属性比較を行ない, どのサンプル間で比較検討を行うかを決定した。これは, 今後, いくつかの共通項目についてデータ比較を行うことを予定しているためである。すなわち, ①2003年調査全サンプル(N=1567), ②2003年調査新規サンプル(N=1203), ③2003年調査パネル分(N=364), ④2001年調査全サンプル(N=1203)の4群について, 相互に, 性別×年齢, 職業, 住所, 人的被害, 住宅被害の5つの属性について, 有意な差が認められないかどうかを確認した。その結果, ①と④との間で調査データを比較することがもっとも適当であることが示された。具体的には, ①は④よりも, 30歳代の女性回答者の比率が低く, また, 70歳代以上の男性回答者の比率が高かったが, その他の属性については, 有意な差異は認められず, 相互に十分比較可能な等質なサンプルを構成していると判断された。よって, 今後, 分析には, 新規サンプル分とパネル分を合算した全サンプルデータ(①)を用いることにする。

表2 調査実査の結果

	2003 調査		2001 調査	1999 調査
	サンプル	パネル		
調査数	3300	501	3300	2500
地点数	330		330	250
全回答数	1356	383	1389	683
全回答率	41.4%	76.4%	42.1%	27.3%
有効回答数	1203	364	1203	623
有効回答率	36.5%	72.7%	36.5%	24.9%

(2) 生活復興3類型の類型化

生活復興3類型への類型化の方法として, 以下の2つが考えられる。第1は, 2章(2)節の項目第1群を用いた直接的な方法で, 第2は, その第2群を用いた間接的な方法である。このうち, 後者は, 項目群の因子分析から導出された因子得点によって類型化する方法で, 立木¹¹⁾が本研究とは別のサンプルを用いた予備分析によって, 3類型に相当する3つの因子が抽出されることを見いだしているが, これについては別途報告し, 本論文では, 第1の方法に依拠して類型化を行うことにする。

先出の表1に, 類型化のために設定した4つの調査項目に対する回答分布が示されている。ここで, 「自分」と「人生」という2つの側面を設定して回答を求めたのは, 回答の「ゆれ」を確認するとともに, 下記に述べる手続きにより類型化をより厳密に行うためである。なお, 自分, 人生いずれの側面についても, 付問の回答対象者

は, それぞれの主問に, 1(強く感じる)または2(やや感じる)と回答した者のみである。表1より, これらの項目に対する回答分布に極端な偏りがなく概ね正規分布に従っており, これらの項目が類型化の基幹項目として最低限の要件を満たしていることがわかる。

1章(3)節の前提から, ここで, Q34Bに3または4と回答した者を復旧型(自分), Q34Bに1または2と回答し, かつ, 付問 Q34B.1に1または2と回答した者を再建型(自分), 付問 Q34B.1に3または4と回答した者を退却型(自分)とカテゴリ化することが可能であろう。人生の側面についても, 同様の方法で, 復旧型(人生), 再建型(人生), 退却型(人生)にカテゴリ化できる。さらに, 以下では, 各類型に典型的に該当する回答者のみを抽出し, 他の項目群との関連分析を行うために, 自分および人生の両側面で, 共通して復旧型(または, 再建型, 退却型)に該当した回答者のみを, 最終的に, 復旧型(または, 再建型, 退却型)として類型化することにする。すなわち, 表3における3つの対角セルに含まれる1172人(234人+800人+108人; 有効回答者の74.2%)が, これ以降の分析の対象者となる。

こうして最終的に得られた3類型の度数分布を図2に示した。図2から, 多くの被災者(分析対象者の70.8%, 全有効回答者の53.0%)が「復旧型」にカテゴリ化された。言い換えれば, 被災地全体を視野に入れ, かつ, 中長期的な視点に立った場合, 多くの被災者は, 震災を大きなライフイベントとはとらえておらず, 被災前の生活スタイルへと回帰する, つまり, 「旧へと復していく」という復旧タイプの生活復興過程を迎えることが示唆される。もっとも, 「再建型」(分析対象者の20.0%, 全有効回答者の14.9%), 「退却型」(分析対象者の9.2%, 全有効回答者の6.9%)も, 無視できない比率で存在していることが明らかとなった。

表3 2種の3類型(「自分」と「人生」)の関係

		3類型(人生)			合計
		再建	復旧	退却	
3類型(自分)	再建	度数 234	95	37	366
		3類型(自分)の%	63.9%	26.0%	100.0%
		3類型(人生)の%	74.8%	10.0%	16.7%
		総和の%	15.8%	6.4%	2.5%
復旧	再建	73	830	77	980
		3類型(自分)の%	7.4%	84.7%	7.9%
		3類型(人生)の%	23.3%	87.7%	34.7%
		総和の%	4.9%	56.0%	5.2%
退却	再建	6	21	108	135
		3類型(自分)の%	4.4%	15.6%	80.0%
		3類型(人生)の%	1.9%	2.2%	48.6%
		総和の%	.4%	1.4%	7.3%
合計	再建	313	946	222	1481
		3類型(自分)の%	21.1%	63.9%	15.0%
		3類型(人生)の%	100.0%	100.0%	100.0%
		総和の%	21.1%	63.9%	15.0%

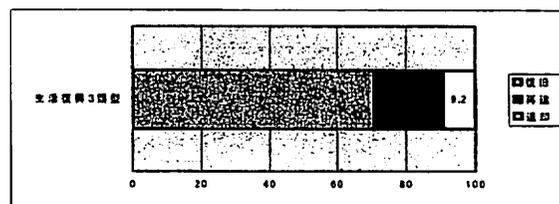


図2 生活復興3類型の人数分布

いずれにせよ, この人数分布—「復旧7割, 再建2割, 退却1割」—は, 今後の復興施策の策定にあたって有力なガイドラインを示すものと言えるだろう。すなわち, この分布は, ポジティブなサイドにしる, ネガティブなサイドにしる, 一部の顕在化しやすい被災者の特徴にと

らわれた復興対策ではなく、7割（有効回答者の53%）という多数の人々の地道な「復旧型」の生活復興に対する支援の必要性を示唆している。しかし、他方では、俗に「6割復興」と称されるように、大多数の「復旧型」のかけに隠れる形で、「退却」の過程を辿っている被災者が1割存在しているという厳然たる事実もある。生活復興支援を完遂するためには、この1割に対するアプローチが最後の関門となることを本データは示している。

(3) 生活復興3類型と基本属性、生活満足度、および、心身ストレスとの関連性

3類型が具体的にどのような特徴を有するかを明らかにするために、まず、性別、年齢、人的被害、住宅被害の4つの基礎的な属性との関連性を分析した。その結果をまとめたクロス表を、表4～7に示した。

3類型は、性別、年齢とは明確な関係をもたない一方で、人的被害（ $\chi^2=59.6$; $p<.001$ ）、住宅被害（ $\chi^2=97.7$; $p<.001$ ）とは明確な関連がある。すなわち、人的被害や住宅被害が小さい被災者ほど、「復旧型」の比率が高まるのだが、被害の大きい被災者には、「退却型」のみならず「再建型」も多く見られる点に注目しておきたい。言い換えれば、被害の大きかった被災者は、「退却」と「再建」に2極化する傾向にあるのである。

次に、「復興感尺度2001」との関連性について検討した。ここでは、2001年調査にならない、毎日のくらし、健康など6側面に対する生活満足度（6項目）、生きがい、人づきあいなど7側面に関する生活充実度（7項目）、将来展望（1年後の生活は現在よりもよくなっているか：1項目）の計14項目を因子分析し、2001年調査と全く同様の1因子構造になることを確認した。具体的には、2001年調査では第1因子の固有値が5.221、寄与率が37.296であり、2003年調査では、固有値が5.320、寄与率が37.999であった。また、いずれにおいても、第1因子の固有値が第2因子以下のそれを大きく上まわっていた。そこで、2回の調査データ間の相互比較を容易ならしめる意味でも、本調査でも、この因子を復興感を測る潜在変数と見なし、その因子得点をもって「復興感尺度2001」の得点とした（詳細は、林³⁾を参照）。その結果、図3に示したとおり、再建型、復旧型、退却型の順で得点が高いことが明らかとなった。また、この差異は統計的にも有意である（ $F=88.3$; $p<.001$ ）。

さらに、生活復興3類型と心身ストレスとの関係について分析した結果が図4である。ストレス得点は、2001年調査とまったく同一の方法で、からだのストレス、こころのストレスに2分して算出した。退却型、再建型、復旧型の順でストレスが高く、この差異は統計的にも有意

表5 生活復興3類型と年齢の関係

		年齢層						合計
		20～	30～	40～	50～	60～	70～	
生活復興3類型	再建	14 20.0%	24 22.0%	42 23.1%	59 21.1%	60 19.8%	35 15.5%	234 20.0%
	復旧	54 77.1%	75 68.8%	124 68.1%	204 72.9%	210 69.3%	161 71.2%	828 70.8%
	退却	2 2.9%	10 9.2%	16 8.8%	17 6.1%	33 10.9%	30 13.3%	108 9.2%
合計		70 100.0%	109 100.0%	182 100.0%	280 100.0%	303 100.0%	226 100.0%	1170 100.0%

表6 生活復興3類型と人的被害の関係

		人的被害				合計
		死亡家族あり	入院病傷者あり	軽病傷者あり	被害なし	
生活復興3類型	再建	4 36.4%	8 30.8%	43 24.7%	153 17.5%	208 19.2%
	復旧	3 27.3%	10 38.5%	102 58.6%	861 75.8%	776 71.7%
	退却	4 36.4%	8 30.8%	29 16.7%	58 6.7%	99 9.1%
合計		11 100.0%	26 100.0%	174 100.0%	872 100.0%	1083 100.0%

表7 生活復興3類型と住宅被害の関係

		住宅被害				合計
		全壊・全焼半壊・半焼	一部損壊	被害なし		
生活復興3類型	再建	58 30.5%	45 19.6%	99 19.0%	31 13.8%	233 20.0%
	復旧	89 46.8%	156 67.8%	392 75.4%	188 83.6%	825 70.8%
	退却	43 22.6%	29 12.6%	29 5.6%	6 2.7%	107 9.2%
合計		190 100.0%	230 100.0%	520 100.0%	225 100.0%	1165 100.0%

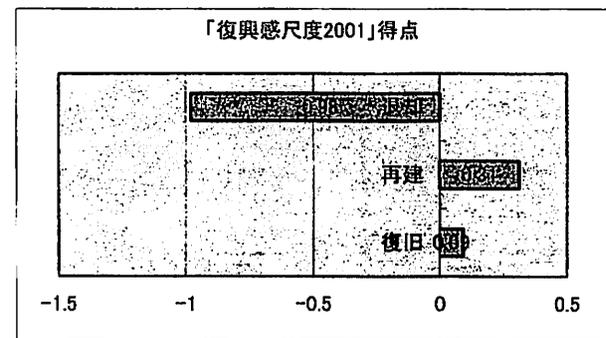


図3 生活復興3類型と「復興感尺度2001」

表4 生活復興3類型と性別の関係

		性別		合計
		男性	女性	
生活復興3類型	再建	99 17.2%	135 22.7%	234 20.0%
	復旧	421 73.1%	409 68.6%	830 70.8%
	退却	56 9.7%	52 8.7%	108 9.2%
合計		576 100.0%	596 100.0%	1172 100.0%

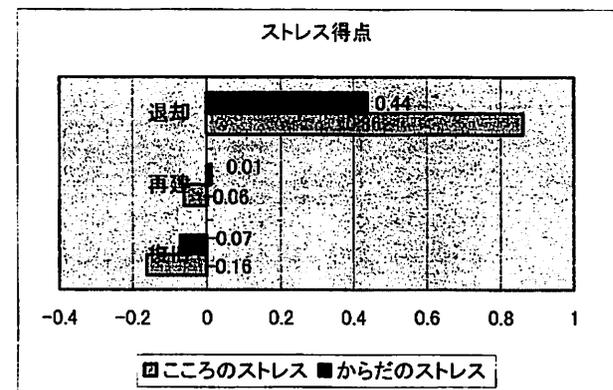


図4 生活復興3類型とストレス度得点

である (F=61.8; p<.001 (ここ), F=14.7; p<.001 (からだ)). 注目すべきは, 「復興感尺度 2001」では最も高得点であった「再建型」は, 「復旧型」よりも大きなストレスを示している点である。これは, 「再建型」には, 被害程度の大きな人々 (その多くは, むしろ「退却型」となる) が含まれており, これらの人々は, 大きなストレスを感じながらも震災の打撃から生活を再建し, 結果としては, 震災からの復興過程をポジティブに評価するに至った人々であると予想される。

以上より, 本論で導入した3類型は, 「復興感尺度 2001」(生活満足度), および, 心身ストレスの状態とも関連を有していると言える。しかし, 上述した「再建型」と「退却型」の複雑な関係性からも, 3類型の相互関係は単線的なものではないと予想される。

(4) 生活復興3類型の特徴—数量化Ⅲ類による検討

生活復興3類型は, 相互にどのような関係にあるのか。また, 3類型のそれぞれにカテゴライズされた人々は, いかなる特徴をもつのか。前節で指摘した「退却」と「再建」の関係, 「復興感尺度 2001」との関連性も含めて, ここでは, 各類型の特徴を総合的に検討してみよう。こうした目的, すなわち, ある特定の変数 (ここでは, 生活復興3類型) と, 他の多様な変数群との総合的関連性の直観的把握を目的とする場合, 林知己夫が開発した数量化Ⅲ類の手法が有効である。多数の項目に対する回答者の反応の類縁性に依りて各カテゴリーに数値が付与され, 反応の近いカテゴリーほど, より近傍に位置するように空間上に図示されるからである。

分析に投入した項目 (カテゴリー) の一覧を, 結果を示した図中における略号とともに, 表8に示した。項目投入にあたっては, 3類型の特徴抽出を主眼として, 多くの調査項目から以下のものを選定した。すなわち, 3類型のほか, 年齢と性別を除く基本属性項目 (両者はすでに3類型との関連性が薄いことが示されているため), 生活満足度, 生活充実度, ライフコース変化関連項目, である。なお, 2値化して投入した項目は, すべて, 5件法 (または, 4件法) での回答を連続量とみて平均値を算出し, 平均値を境界値として2値化した。

表8 数量化Ⅲ類投入項目と表示記号

11	復旧	12	再建	13	退却
21	全焼	21	半焼	21	焼
23	一部焼	22	壊滅	22	なし
31	一部焼	23	壊滅	23	なし
33	一部焼	32	壊滅	32	なし
41	一部焼	34	壊滅	34	なし
51	一部焼	42	経済被害	43	経済被害大
61	一部焼	52	経済被害	53	経済被害大
71	一部焼	62	経済被害	63	経済被害大
81	一部焼	72	経済被害	73	経済被害大
91	一部焼	82	経済被害	83	経済被害大
A1	一部焼	A2	経済被害	A3	経済被害大
B1	一部焼	B2	経済被害	B3	経済被害大
C1	一部焼	C2	経済被害	C3	経済被害大
D1	一部焼	D2	経済被害	D3	経済被害大
E1	一部焼	E2	経済被害	E3	経済被害大
F1	一部焼	F2	経済被害	F3	経済被害大
G1	一部焼	G2	経済被害	G3	経済被害大
H1	一部焼	H2	経済被害	H3	経済被害大
I1	一部焼	I2	経済被害	I3	経済被害大
J1	一部焼	J2	経済被害	J3	経済被害大
K1	一部焼	K2	経済被害	K3	経済被害大
L1	一部焼	L2	経済被害	L3	経済被害大
M1	一部焼	M2	経済被害	M3	経済被害大
N1	一部焼	N2	経済被害	N3	経済被害大
O1	一部焼	O2	経済被害	O3	経済被害大
P1	一部焼	P2	経済被害	P3	経済被害大
Q1	一部焼	Q2	経済被害	Q3	経済被害大
R1	一部焼	R2	経済被害	R3	経済被害大
S1	一部焼	S2	経済被害	S3	経済被害大
T1	一部焼	T2	経済被害	T3	経済被害大
U1	一部焼	U2	経済被害	U3	経済被害大

V1	感動	減少	少ない	V2	感動	増加	多かった
W1	動	少	く	W2	動	増	多
X1	動	少	く	X2	動	増	多
Y1	動	少	く	Y2	動	増	多
Z1	動	少	く	Z2	動	増	多
a1	動	少	く	a2	動	増	多
b1	動	少	く	b2	動	増	多
c1	動	少	く	c2	動	増	多
d1	動	少	く	d2	動	増	多
e1	動	少	く	e2	動	増	多
f1	動	少	く	f2	動	増	多
g1	動	少	く	g2	動	増	多
h1	動	少	く	h2	動	増	多

最も説明率の大きな第1根と第2根の数値を横軸と縦軸に対応させて図示したものが図5である。図5は, 生活復興3類型が, 理論的に予想されたものとまったく同じ構造をなして解空間上に布置することを示している (両軸の順序関係が逆転しているが, 構造上は図1と同一である)。すなわち, 「復旧」が第2根のプラス側に, 「再建」と「退却」がマイナス側に位置し, かつ, 「再建」と「退却」は第1根の両サイドにクリアーに分離された。後述するように, 他のカテゴリーの布置状況をあわせて勘案すれば, 第2根が, 震災をライフコース上の重要な転機とするか否かを区別する軸, 第1根が, 震災というイベントをポジティブにとらえるかネガティブにとらえるかを分別する軸であると解釈することができる。以上より, 第1章で提起した枠組みは, 少なくともその基本構造に関する限り, きわめて明快な形でその妥当性が検証されたと言えるであろう。

次に, 各類型の特徴を描出するために, 各類型の近傍に布置したカテゴリー群を順次見ていこう。

まず, 「復旧 (11)」である。属性要因としては, 24 (家屋被害無し), 41 (経済的な被害が小) であり, 「復旧型」には, 被害の小さな被災者が多いことがここでも確認できる。他の項目としては, 震災に対する関心の低さ, 人生へのインパクトが小さいことを示す項目が多い。R2 (震災で精神的成長をしたとは思わない), P2 (人生の使命を考えるようになったとは思わない), O1 (今はもう震災を話題にしなくなった), g2 (震災を区切りとする言い方はしない), f1 (当時から被災者としての実感がなかった) などである。同時に, B1 (家での時間が減少), C2 (仕事量が増大), G2 (家計状況に満足) など, 震災の衝撃から立ち直り, 忙しい日常生活に回帰していることを示す項目も周囲に存在する。これは, 「復旧型」の人々が, 第1章で想定したタイプの復興過程を経ている人々であることを示している。

次に, 「再建 (12)」である。「再建」は, 属性要因との結びつきが弱い。これは, 表6, 表7からも読みとることができるように, 「再建型」には, 被害程度の小さな被災者と逆に大きな被災者が混在していることに由来する。すなわち, この「再建型」には, 被害が小さかったために, 震災とは関係なく生活をさらにポジティブな方向に展開できた人々と, まったく逆に, 大きな被害を受けたものの (あるいは, だからこそ) そこからの復興過程に非常にポジティブな意味を見出し, 結果として, ここで言う「再建型」にカテゴライズされた被災者が併存していると考察される。しかし, 「再建型」は「復旧型」よりも高いストレスを示していること (上記(3)で指摘), および, ここで周囲に位置する項目の内容から, 両者のうち, 主として, 後者のタイプの被災者がこの「再建型」の主力をなしていることが示唆される。すなわち, 再建型の近傍には, P1 (震災で自分の使命を考えるようになった), R1 (震災で精神的に成長した), U1 (生きることには意味があると思う), e2 (震災を対

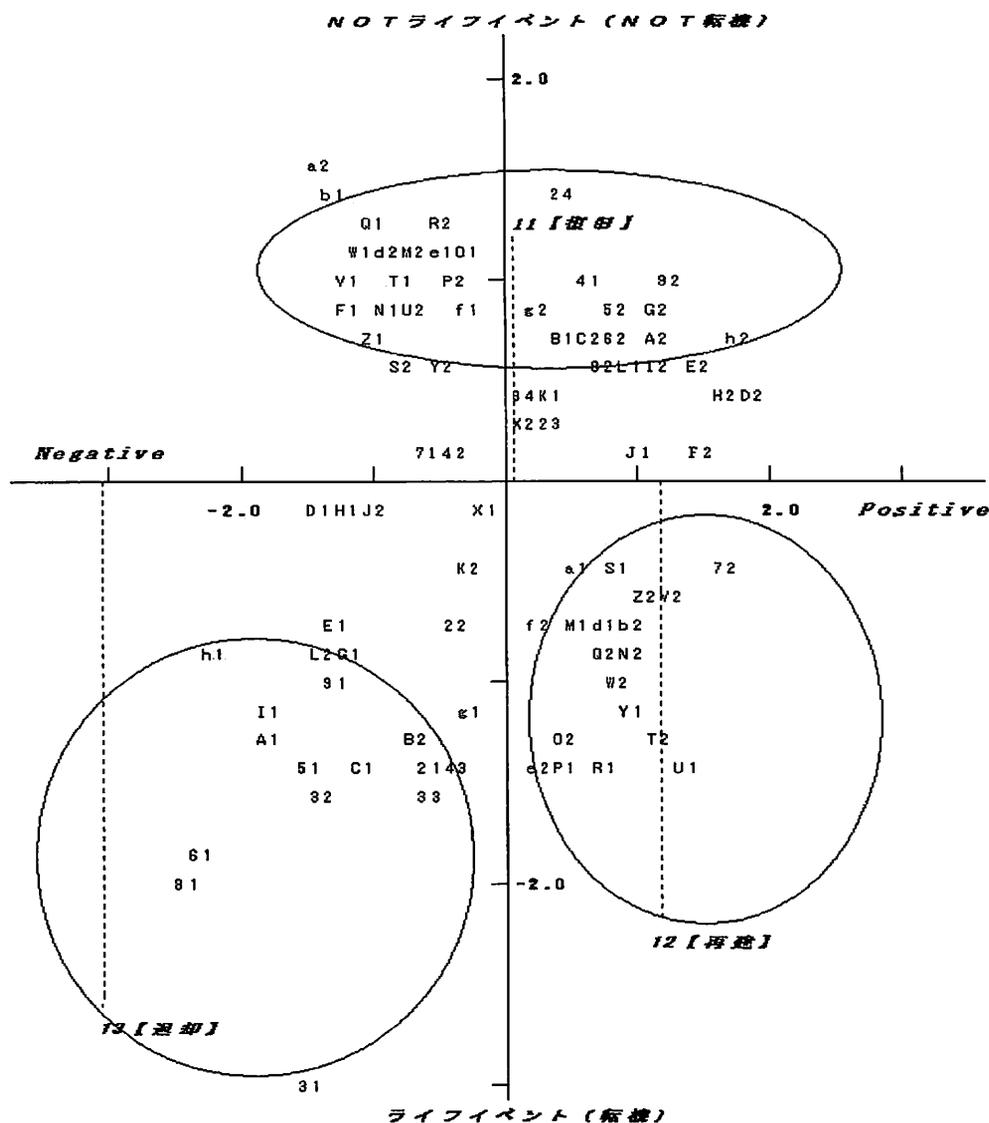


図5 数量化Ⅲ類による生活復興3類型と諸項目との関連分析図

岸の火事とは思わなかった), O2 (今でも震災を話題にする), T2 (震災を思い出したくないとは思わない), Y1 (自分には生きる勇気がある) といった, 震災を重要なライフイベントと位置づけ, かつ, そこからの復興過程を肯定的にとらえていることを示す項目群が布置しているからである。以上より, 「再建型」も, 仮説通りの特性を有する被災者であることがわかる。

最後に, 「退却 (13)」である。「退却型」は, 特定のデモグラフィックな要因との関連が歴然としている。31 (家族に死亡者あり), 32 (家族に入院病傷者あり), 33 (家族に軽病傷者あり), 21 (自宅が全壊・全焼), 43 (経済的な被害が大) である。つまり, 家族に死者, 負傷者が存在したり, 自宅に大きな被害を蒙った被災者は, 「退却」の過程を辿る可能性が高いことがわかる。もっとも, 全員がそうではないことも, 表5, 表6よ

り明らかで, この点は重要である。「退却」を特徴づける項目としては, 61 (生きがいを感ずることが減った), 81 (日常生活を楽しくおくることが減った), 51 (忙しく活動的な生活を送ることが減った), A1 (元気でつらつとしていることが減った), C1 (仕事の量が減った), B2 (家で過ごす時間が増えた) などであり, 震災の衝撃から回復できず非活動的となり, 自宅にひきこもりがち生活を送っていることが示されている。よって, 「退却型」についても, 予想された通りの特徴を有していることが検証された。

最後に, 以上3類型と「復興感尺度 2001」との関係性を, 図5で再確認しておこう。同尺度値の平均値で2分割したカテゴリーは, 第3象限 (h1: 復興感低) と第1象限 (h2: 復興感高) に位置している。このことは, 従来の「復興感尺度 2001」が, 図5の縦軸 (ライフイベン

ト性の大小)と横軸(肯定的・否定的評価)の双方の要素を混在させ、両者をクリアーに分離できていなかったことをよく示している。また、両者が相対的に横軸側でより大きく離れて布置していることは、「復興感尺度2001」が、肯定的・否定的評価とより強い関連をもち、震災体験がもつライフイベントとしてのインパクトの強さ(縦軸側)を逸していたことを物語っている。

同じことは、3類型の横軸に対する射影(図5の点線)からもわかる。3類型の横軸値は、再建型(1.19)、復旧型(0.10)、退却型(-3.07)である。この3つの数値の相互関係は、図3に示した「復興感尺度2001」の尺度値におけるそれと酷似している。すなわち、「復興感尺度2001」は、基本的には、図5の横軸成分を反映しており、「復旧型」を中央において、ポジティブ側の「再建型」と、ネガティブ側の「退却型」をクリアーに分離することに成功していた。しかし、縦軸で表現されているように、「再建型」と「退却型」は、震災を重要なライフイベントとしてとらえるという点では、類縁性を有している。この点が、「復興感尺度2001」では捕捉しきれなかった側面であり、本論で提起した生活復興3類型の大きな特徴と言えるであろう。

(5) 総括

最後に、これまで述べてきたことを総括するとともに、今後の課題・展望についてまとめる。

a)被災者の生活復興感は、生活満足度(「復興感尺度2001」と関連を有しながらも、概念的にも測定上も、それとは区別される生活復興3類型—「復旧型」「再建型」「退却型」—によって整理・分類することができる。

b)生活復興3類型は、2001年調査の結果、および、従来のライフイベント研究の成果から導出されたもので、第1に、災害が、被災者にとって重要なライフイベントとして機能しているか否か、第2に、それが、その後、新たな意味を付与され、相対的によりポジティブなイベントとして意義づけられているのか、反対に、よりネガティブなイベントとして定位されているのか—以上2つの軸を直交させることによって分離される。

c)上記2軸に関連する4つの調査項目によって3類型を類型化し、数量化Ⅲ類による関連性分析を行なったところ、3類型は仮説通りの布置関係と特徴を有することが実証された。すなわち、被災を大きなライフイベントとは見なさず、被災前にそのまま復する「復旧型」、被災を大きなライフイベントと位置づけ、かつ、それをポジティブにとらえる「再建型」、ネガティブに位置づける「退却型」が、図5の通り、2次元空間上に付置した。

d)従来の「復興感尺度2001」とは異なり、生活復興3類型は、震災をポジティブに評価するかネガティブに評価するかという次元では、反対の特徴を有する「再建型」と「退却型」が、震災のライフイベントとしての重要性の次元においては、むしろ類似しており、「復旧型」と対照をなすことを見いだした。

e)3類型は、「復旧型」7割、「再建型」2割、「退却型」1割という分布を示すことが明らかとなった。従来、被災者の復興支援事業は、とすれば、被災者全体を視野に入れた画一的なものとなるか、反対に、個々の被災者の個別的事情に分け入ったソーシャルワークや臨床心理学的支援の色彩を強く帯びるか—このいずれかに二極化しがちであった。ここで示した3類型は、両者の中間に位置し、被災者全体を視野に入れつつも、生活

復興パターンのちがいを大局的に把握しようとしたものである。今後は、こうしたの類型のちがいを、および、その比率を踏まえた支援事業・施策を展開していくことが望まれる。

f)「再建型」と「退却型」は、被災を重要なライフイベントとして位置づける点で共通する一方で、その評価の方向性は正反対である。ここで、この正反対の方向性は、文字通りの正反対ではなく、ある種のアンビバレンスを表現していると予想される点が重要である。実際、矢守¹²⁾は、震災の語り部活動に関する事例研究において、語り部活動が生きがいであると同時に、それにストレスや疑問を感じながら活動する被災者のケースについて報告している。つまり、「再建型」と「退却型」は、容易に反転しうるような関係性にあると予想できる。こうした微妙な関係性については、今後、2つの類型化基準(3章(2)節を参照)によって異なる類型に類型化されたケースに注目する必要がある。本報告では、3類型の妥当性の検証を主目的としたため、各類型に典型的に該当する回答者のみを抽出して分析にあてた。しかし、ここでの目的には、本論では分析から除外したケース(表3の非対角セル)が、むしろ、重要な情報を提供してくれるであろう。

g)被災者が、生活復興3類型のうちどの特徴を示すかは、けっして固定されたものではなく、時間の経過とともに変動すると思われる。この点は、今後予定されている4回目の調査を待ってパネルデータを用いた分析を通して解明していく必要がある。

謝辞

本調査の企画・実施・分析にあたっては、浦田康幸氏(ハイパーリサーチ(株))の多大な援助を得た。記して、心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 林 春男(編):神戸市震災復興総括・検証生活再建分野報告書,京都大学防災研究所巨大災害研究センター・テクニカルレポート,2000.
- 2) 林 春男(編):震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査,京都大学防災研究所巨大災害研究センター・テクニカルレポート,1999.
- 3) 林 春男(編):阪神・淡路大震災からの生活復興2001—パネル調査結果報告書—,京都大学防災研究所巨大災害研究センター・テクニカルレポート,2001.
- 4) 林 春男:心的ダメージのメカニズムとその対応 ころの科学,65,25-33.
- 5) 岩井圭司・加藤寛・飛鳥井望:出来事インパクトスケール改訂版(IES)によるPTSD症状の評価—阪神・淡路大震災被災地の学校教職員の調査から— 精神神経学雑誌,100,1018-1019.
- 6) キューブラ,R.:死とその過程について(鈴木訳) 読売新聞社,1998.
- 7) デーケン,A.:死とどう向き合うか NHK出版,1996.
- 8) リフトン,R.J.:現代,死にふれて生きる(渡辺・水野訳) 有信堂,1989.
- 9) フランクフル,V.E.:夜と霧(池田訳) みすず書房,2002.
- 10) Holmes, T.H. & Rahe, R. H.: The Social Readjustment Rating Scale. Journal of Psychosomatic Research, 11, 213-218, 1967.
- 11) 立木茂雄:生活復興感尺度に関する予備分析 2003年生活復興調査第6回研究会配付資料,2003.
- 12) 矢守克也:4人の震災被災者が語る現在 質的心理学研究,2,29-55,2003.

(原稿受付 2003.5.23)